

シングルファーザーの家族生活と仕事生活の葛藤に関する質的分析 —構造とエージェンシーによる検討—

小野江優介（日本福祉大学大学院）

1. 背景と目的

ひとり親家庭の抱える問題として、ひとり親家庭は仕事と家族ケアの両立困難を抱え、家庭役割を優先せざるをえず、経済的な不安が生じやすいとの指摘がある（下田・清水・黒瀧・上野・石井 2022）。

このような仕事と家族ケアの両役割割間の葛藤的な状況のことを、本研究では「ワーク・ファミリー・コンフリクト（Work Family Conflict、以下 WFC）」の呼称を用いる。父子家庭、および WFC における先行研究においては、彼ら・彼女らの生きづらさや生活困難に注目し、心理学的視点で検討する研究が多く存在する。しかしながら、心理学視点のみによる検討だけでは、個人以外の要素の検討を行うことが難しい。そこで、本研究では、WFC 概念を用いて、社会学視点にもとづいた検討を行う。

本研究では、構造化理論にもとづいて、以下の2点を研究課題として設定し、社会と個人の両面からシングルファーザーの仕事生活と家族生活を検討することを目的とした。

①シングルファーザーは仕事生活と家族生活両面においてどのような構造下にあるのか明らかにすること。

②シングルファーザーは彼らの置かれた構造下において、どのような行動を行いながら生活を運営しているのか明らかにすること。

2. 方法

本研究では、過去3年間の間に18歳以下の自身の子と同居し養育している7名のシングルファーザーを対象として個別での半構造化面接を行った。なお、うち1名はデータの示し方について十分な同意を得られなかったため、研究協力者は6名である。抽出方法は機縁法である。調査は2024年5月より2024年9月までの期間に行った。本調査で得られたデータは逐語録に起こし、Giddens の構造化理論の視点よりデータの分析を行った。

なお、本研究は、日本福祉大学大学院「人を対象とする研究」計画等倫理審査委員会により承認を得て行われるものである。（承認番号：23-051）

3. 結果

調査の結果、仕事生活においては、シングルファーザーには仕事をこなすことを求める構造が存在していた。変化した自身の生活を運営できるよう時短勤務や残業をなくすことなどを求めてシングルファーザーは職場に働きかけを行う。しかしながら、いったん要求が認められても、時間の経過とともに元の働き方に戻るよう職場からアプローチが重ねられる場合があることが確認された。

家族生活においては、シングルファーザーは男性が親役割をこなすという点で現在の社会で通念としてある父親とも母親とも異なる構造下にある。そのなかで、シングルファーザーは、育児の情報を得るために母親コミュニティと関わりを持つ必要があった。彼らは、偶然や数少ない他の母親との接する機会を最大限活用し、つながりを持つことを試みていた。

研究課題①に対応する結果としては、職場の構造はシングルファーザーの時間的余裕を減らす特徴を持っており、そこには1度交渉をして構造を改変しても構造自身が元に戻ろうとする弾性ともいえるべき存在が示唆された。家族生活においては、シングルファーザーの家族運営には性別を越えて母親コミュニティと関わりを持つ必要があるなど障壁を乗り越える必要があった。シングルファーザーは性役割構造のはざまにあることが確認された。

研究課題②に対応する結果としては、シングルファーザーはこれらの構造に対し、エージェンシーとして、仕事生活では職場との交渉と再交渉を重ねながら子どもの養育のための時間的余裕を確保しようとする事が確認できた。家族生活では自身の性別から母親コミュニティとの関わりに障壁を感じつつも、子どものイベントなどを契機に他の母親とのつながりを形成し、円滑に養育ができるよう行動していることが示唆された。

本研究の限界としては、ケース数が少ないため代表性がないという点に加え、機縁法による抽出を行っていることから、本研究の結果を一般化することが難しいことが挙げられる。

キーワード：シングルファーザー、構造、ワーク・ファミリー・コンフリクト